

## 「市町村合併の制度と現実

### ——真鶴・湯河原の合併検討過程から——」

前真鶴町長 三 木 邦 之 氏

私は原稿を書いてしゃべったことがないので、いつも手ぶらでやってくるのですが、何かないといけないかと思  
いまして、真鶴町役場でももうお蔵に入って捨てようという書類を廃品利用の形で無償でもらってきたものです。そ  
れをお手元に回ささせていただきました。今日はかなり重いものでしたが、それを袋に入れて持って参りました。これ  
が実はまた後でお話し致します個別行脚という実際には二七〇〇世帯しか回れなかったのですが、町民三四〇〇世帯  
を一軒一軒訪問した時に資料を入れて持って回った鞆です。

満で六四歳になりました、以前は話なら一時間や二時間はできたのですが、歳を取ると話が元へ戻る。元々の話が  
元へ戻らなくなる。横道に逸れると元へ戻らなくなるということで、今日はメモを持ってきました。それもどこへ行  
ったのか分からないのですが、そのメモを基にして湯河原町との合併で経験したことを皆様にお伝えしていこうと思  
っております。

神奈川大学に招かれたのは、これが二回目になります。前回は平成一〇年ですから、もう七年前になるでしょうか、  
ちょうど二月頃の受験のシーズンだったと思っております。

先生方が特に駅伝の選手の選考や何かで忙しいということを聞いておりましたから、恐らくそんな時期だったと思い

ます。いま紹介にもありました通り、町づくり条例あるいはその中にある町づくり計画、その前の水を止めるといった水の条例など独自の条例を出させて頂きましたので、そのようなことについて話をさせて頂きました。今日は時間あまりということですから、どこまで話ができるか分かりませんが、時間までお付き合い願います。

講演を頼まれて一番嫌なのは、この一時半、二時という時間が嫌なのです。私は聴く方のこともありますから、その時はそれは先生方が一番よく知っているでしょうが、眠い時間です。つまらなかつたらどんどん寝て下さい。こちらは勝手に話をして行きますし、時間がくればお役ご免なわけですから。平成一〇年にこちらへ来て、町づくり条例等について話をしました。

条例は作ってみたものの、それがすぐ町づくりに反映できるかということとそんな簡単なものではない。ああ、あの条例を作っておいてよかったなというのは、おそらく三〇年くらい先にならないと分からないよ、とのは条例を作った時のシンポジウムで私が話をしたことです。この条例に一生懸命力を貸してくれた、いま法政大学の教授になつています五十嵐敬喜先生はそんな三〇年なんて困るよとおっしゃいましたが、町づくりというのはそういうスパンで考えるべきものです。今日やったことが明日すぐ結果が表れるというなら、金を与えていけばそれでいいわけですし、そんなことは政治行政のすることではない。

結果は三〇年先という話をしたわけですが、それでも条例を作って町が以前と変わってきたなと気分的にそんな風な時期に私はこの平成一〇年に三期目を迎えるわけです。こちらにこの時期に来て、その六月には三回目の町長選挙ということでした。この町長選挙の時に私は後援会も持ちませんから、自分でパソコン一つ使って娘に似顔絵を描かせて、公約を刷って、一人ひとり話しをするのが一番簡単選挙運動でして、真鶴はそれができる町なのです。

三四〇〇世帯というのは、ゴールデンウィークや夜間を使えば、現職であつても公務にし支障もなく一カ月ぐらいで

全世帯回れるわけです。それがあから、このたびの町内行脚も人はこの暑いのにと言いますが、いつでもやっていることだからできるのです。

そのときの三期目のお約束が健全な財政運営、きめ細かな在宅福祉というものです。そして町民が提言した町づくり条例の中の町づくり計画で、町民の提言を計画として表すというもので、当時三〇〇〇余の提言があったのです。八九三の事業にこれを進めます。それはつまらない提言もありますから、これを取捨選択しながら八九三の事業を向こう二〇年間の町の事業として載せてあるわけです。これらを着実に実施して行くことをお約束する。そして何よりも徹底した行政改革をして行く。そしてあらゆる情報の公開をして行きながら、住民自治の町を作って行きたい。今よく住民自治、住民参加と言っていますが、本当にこれができている町など日本全国三〇〇〇余の市町村の中で、一つもないと言っても誰にも怒られないと思います。それだけ行政主導の地方行政が展開されているからです。小さな真鶴でさえ、これだけの作業でさえ行政主導でやったことは間違いないわけです。

なぜこの中に健全なる財政運営というようなものが出てくるかと言えば、平成一〇年頃になって初めて大変だ大変だとやっとバブルが崩壊してもう一〇年経っているのですけれども、やっと分かってきた。これはもう大きな銀行が倒産していく。ゼネコンも統合されて行くのだ。その時よく私が言っていたのは、まだ国が借金していても平気だ。金持ちが二つある。一つは個人資産で一人ひとりの国民がお金を持っている。貯金でため込んでいるわけです。あと一つは地方自治体が金をため込んでいる。横浜だって神奈川県だってその頃はもう金庫の中に潤うほどお金があったわけです。小さな真鶴町でも借金よりも貯金の方が多く、つい最近まで真鶴はそうでした。借金もしていますけれど、貯金、基金の方が多いのです。そこに金があるから、当時は平成一〇年だから一兆円余円の借金があるといっても心配することはない。その倍以上の金がある。郵便貯金を見てみれば分かるというような時でしたが、いよいよそ

の自治体が危ないというのが平成一〇年です。公債比率が一五パーセントを超えると危険信号だよというのがわれわれ自治体でそう言われています。県から指導を受けるのです。神奈川県は町村はそうではないのですが、全国で六割を超える自治体が危険信号になっているのです。次の財政破綻は今度は地方で起こってくるぞ。その前に国家財産が大変なのです。今いつているように八〇兆の予算を組むのに、半分の四〇兆の借金をしなければできないと言ったら、三〇〇万の収入の人が六〇〇万円の生活をしているようなものですからね。どんどん借金が増えるに決まっています。それはそれぞれの党によって、自衛隊があるからあの金を持ってくればいいという党もありますけれども、そんなことで国が成り立って行くというものでもありません。

では、どこが一番金を残しているのかというと地方が金を取っているのです。交付税という名のもとに、補助金という名のもとに。国で税金はほとんど吸い上げて行くけれども、その吸い上げた税金が還元されていくのが、地方三〇〇の市町村です。横浜、川崎は自力でできるからいいのですが、神奈川県の中でも一八市町村のうち三分の一くらいは自力でできるのです。うちの隣の箱根町などは一・五〇つまり五〇パーセントぐらい収入の方が上回っているのですが、大変は大変なのです。そんなに収入があるから楽かといえばそうでもない。あるだけの山をしょって、あるだけのいろいろな行政ニーズの中から、一人だけの収入があっても大変な中に、真鶴は今〇・五という財政力指数ですから。交付税、補助金に半分厄介にならなければできない。その財源は垂れ流しでいくのか、いや何とか抑えなくてはならない。どうしたら良いのだというのが、これは町村の足腰を強くする。みんな川崎、横浜であれば良いのですが、そんな簡単になるわけではない。それでも、地方自治体を大きくして行くことによって、スリムになるだろうというところから、そういう気運が高まってきたわけです。

時代背景がそこにある。だから私は健全なる財政運営と当時威張ったものです。それは神奈川県の中でも公債比率

が一五パーセントが危険信号だと言いましたが、真鶴は五パーセントくらいで済んでいるんだ。これがあまりに徹底し過ぎてしまつて、「今の町長さんはよくやっている、よくやっている」「貧乏ながらもこんなによくやっている」これが合併の後でいうと弊害になつてきたことは事実なのです。あまり宣伝したつもりはないのですが、町民の間で真鶴はよくやっているというのが、かなり染み渡っているのは全部を回つても分かるわけです。こんな状況の中に平成一〇年、私の三度目の選挙がありました。そして私は三度目知事であろうと区長であろうと市町村長であろうと大きな権限を持っています。議会があるけれど、議会なんて首長の権限に比べたら全く無きに等しいと言っても良いくらい権限の無いものなのです。だとしたら、この大きな権限を持った市町村長、大統領制度ですから、一つの決断で物事が進んで行くというのがそれです。こういう権限を持った市町村長、知事に至るまでこれは三期が限度であろうと、この前来た時もおそらくそのような話をしたと思っております。

どこへ出てもそんな話、つまり私は三期一二年で辞めて行きますということです。ですから、それらも含めて先ほどの公約をしたわけです。ただそういう状況が日に日に目に見えてきて私共の喉元に食い込んでくるような状況が展開される。そこでその翌年の平成一一年、これは湯河原の町長選挙があるのですが、今の米岡町長が二期目の挑戦で、これが統一地方選挙でした。平成一一年四月二〇日のことでした。私は米岡さんとは年は米岡さんの方が四つ上ですが、町長になつたのは私の方が早く、政治的な関わりを持つてずっと付き合いをさせて頂いています。米岡さんは告示で無投票で当選でしたから、四年間湯河原町を任せられたわけで、このお祝い席に呼ばれ挨拶をしろと言われました。そこで、私も後三年任期が残っている。どうだろう、今まで続いてきた広域行政にここらでピリオドを打とう。湯河原と真鶴は究極の行財政改革・合併によつてさらにこれを進めて足腰の強い自治体に行きたい。お祝いの席でそう挨拶して発表したわけです。当時、新聞の神奈川版に載つたのですが、私の口から「合併」ということが公に



出された。五〇〇人くらいの方が集まっていたから、一瞬その場はしんとなくなっていました。唐突に聞こえるかもしれないがしんとなくなつて、ここから後に真鶴と湯河原の合併の話が始まるわけです。

その平成一年四月というのは非常に大事な時でして、その直後の七月に合併特例法というのが出てくるわけです。今までも合併特例法はあるのですが、これがさらに強化された。要するにもっと前にさかのぼりますと、私が一九九〇年に町長になつてすぐに、いろいろな方面に呼ばれていたのです。その頃地方分権ということで、後に総理大臣になつた細川さんもこれに参加して、分権の部会の部会長などしていたわけです。こういった方がやっていたけれども、その頃自民党で一番権力があつたのは小沢一郎さんでした。小沢一郎さんはこれは自治省のお役人の考えなので、自治省の主流は三三〇〇の自治体を三〇〇くらいにしないと国が大変になるぞというものです。このバブルがはじけた直後に自民党、国は自治省は考えていたわけです。その頃、蠅螂（とうろう）の斧である小さな町の町長が小沢さんに向かって何を言つたつてしょうがないけれども、私がこういった事で話ある度に、ならば小沢さん、岩手県からそれをやってきてくれと言いました。図面の上でそれは五〇万、三〇万の町村を作るのは簡単だけれど、あの雪深い岩手で五つの町、十の町が一緒になつて一つの自治体ができるかどうか。自分の選出されている岩手県でそれをやってくるなら、私共もそれをまねしましょうよ。逆に言えば当時はまだそこまで切迫していなかったから、それでそんな話もしたことを覚えております。ただここへ来て、やはり国がこういつた形で出てくる以降の国税制度も考え直そう、あるいは補助金制度。いま言う三位一体改革のスタートが平成一年くらいから切られたという時代背景にあつたということとは間違いない。

そういう話をして唐突に思われるかもしれないが以前から両町の合併の話はあつた、あるいは合併の話になると真鶴の町民に中にも二〇万の小田原があるじゃないか、箱根もあるじゃないか。あるいは上郡もあるじゃないか。なぜ

合併の模索をしないんだという声があった。なぜ私が湯河原・真鶴かと言いますと、湯河原・真鶴はその時点でもうすでに三八年間広域行政を組んでいたのです。そういうことですから、この広域行政の結論を出しようというところで話をしたわけです。その前を遡りますと、昭和の大合併、昭和二九年に湯河原町、吉浜町、あるいは福浦村、真鶴町、岩村という今の湯河原町と真鶴町が五カ町村に分かれている時代のことですが、これが戦争後の町村合併促進協議会という任意の団体を持って合併して行きましょうという作業に入っていた。

それが昭和三〇年の四月、合併がほぼ決まったのです。その時私は中学二年生の二月で寒い時でした。おやじは漁業組合の組合長をやっていて、町の議長をやっていたのです。真鶴ばかりではないですが、その当時相模湾はブリがいっぱい獲れたのです。ブリ大臣といわれるくらいでした。私はそれから後苦勞するのですが、その当時は乳母日傘と言いますか、欲しいものは何でも買ってもらえるような家にいた。ですから町長ができるけれども、父は組合の方が忙しいから議会があつて議長をやつて、実質の町長のようなことをやっているわけです。私と違って父は無口な人でしたから、よくこんな人が議長をやっている、町の実権を握っているというような人でした。そして怒ることもない、感情に走ることもない人でした。

ある日の夜、夕飯が終わつた私たちの所にさつと帰ってきました。小股でぱたぱた歩く。神奈川県にもよく陳情に行っていた。真鶴のチャボが来たと県庁であだ名を付けられるくらい、よく県庁に通っていたようです。私はおやじと反対でよっぽど大事なことがあれば行きますが、県庁にはほとんど行かないのです。そんなおやじが帰ってきて、当時の吉浜に鍛冶屋という所があつて、水がある。今の真鶴の湯河原からもらっている水もこの水を回してもらっているのです。この鍛冶屋の人が「馬にやる水はあつても真鶴にやる水はないと言いやがつた。こんなことで合併はできるか。」と言つて帰ってきた。顔を真っ赤にして怒っていたおやじを見て、おやじもこんな怒ることがあるのか

なと思ったことを今でも鮮明に覚えています。

四月の合併が決まっていたその二月前に、真鶴はこの水を湯河原町が回してくれないということで合併が壊れたのです。当時は町民に相談するも何もないのです。権力者がこれではでは合併はなし、そして後から合併よしと知らせるだけで、では仕様がなしとなるだけでした。その時湯河原は、真鶴、岩村を残して三カ町村が合併したのが昭和三〇年。その翌年に残された真鶴と湯河原が今と一緒に一町でやっ行くのは大変だ。当時の合併でも国、県のメ玉というものがありませんから、それをいただきながら新しい町を築こうというので新しい真鶴町が三一年の九月に誕生するわけです。そんなことで喧嘩別れしているのですから、真鶴と湯河原はそれから冷たい関係に入るわけです。

それが昭和四〇年位なりまして、冷たい関係になった時の町長が一六年やって代わるわけです。湯河原町も町長が代わる。町長が代わったところで、いつまでも諍いをしていしょうがない。湯河原町が火葬場を立て替えなければいけなくなりました。火葬場は今の厚生年金病院の上にあったのです。新しい建て替えるところは、そこでは新しい家がたくさん建っていますから、もう賛成を得られない。場所をどこに移そうにも、湯河原には移す場所がない。箱根の方、大観山のほうに持っていけば建つでしょうが、あんなところ冬になったら霊柩車も上がらないような場所だということになるわけです。真鶴駅のすぐ北側に歩いて駅から五分ほどのところに真鶴の火葬場がある。そこには二軒のお寺さんの墓地に囲まれている。真鶴はそこに建て替えても当時はとても反対の出るような場所ではなかった。では真鶴で火葬場を引受けてくれないかという話が出て、そういう迷惑施設を持つてくるなら、湯河原さん水を下さいよということで昭和四〇年にこのバスターが始まるわけです。

それから、昭和四〇年から現在に至るまで湯河原町とのし尿の海洋投機が始まった。湯河原には福浦という漁港があります、大きな船を停めるわけにはいかない。だから真鶴港から屎尿を運ぶ船が出ますから、湯河原の屎尿を運



ぶ車も全部持っていくことになりました。下水道など当時はありませんから、湯河原の尿尿を全部真鶴港に集めるわけです。そして、尿尿もごみ焼却も二町でやりましょう。水道は回しましょう。消防を常設しなくてはならない。消防も救急も二町でやりましょう。下水道も真鶴は神奈川県の中で一町だけ、建設にかかっていない町だということで、これも湯河原町の下水道を遣わせてもらうということで合意した。

こうして大きな事業は全て一緒にやってきた。当時私は、湯河原と真鶴は体が一つになっている。頭が二つある必要があるのかということをよく町民や、湯河原の人達に話をしていました。そう言った合併の必然性も広域事業を進めてこのままでもいいのだけれど、せっかく国が出してきた特例法の中でまだまだその部分は出てきていないのです。そんなに出てきていないけれども、やはりこの際考えましょう。よし分かったと言ったのが一年の四月に私が話したことです。今言ったように行政的にも一緒になっております。

この写真を見て頂ければ分かるのですが、上写真が真鶴半島を中心とした真鶴ということになっております。下が吉浜海岸から温泉場を中心にした湯河原ということになっております。ただしこの上は真鶴全部ではないです。斜めの線を切ったこの半分が真鶴なのです。それも海と山が三分の二くらいですから、真鶴というのはこんな小さなところなのです。このすぐ隣は湯河原なのです。真鶴の駅を降りてプラットホームを湯河原側に歩いて外れたところが、これはもう湯河原町なのです。そのすぐ北側に真鶴の中学校があります。中学校の左側の丘に住宅があります。あれは一目目は真鶴ですが、その上にいくと湯河原なのです。ですからあの近所の人、福浦、川堀、吉浜の一部の人は湯河原の中学校に通うより真鶴に来た方が近いのです。真鶴の駅は平日は乗降客が多い。土日は湯河原の方が温泉町ですし、あれだけの施設があるので多いに決まっていますが、平日は真鶴の方が多い。今言った福浦、川堀、あるいは吉浜の半分くらいはみんな真鶴の駅へ来て乗降する。それほどもう地形的にも一体化しているわけです。

その上で郵便局も一つに統合されています。あるいは農協も統合されています。信用金庫も合併の頃から一つに統合されている。ですから西相地区合併促進という名前をとって「西相信用金庫」となりました。最近これは事実上倒産したのですが、統合されて、「さがみ信用金庫」に統合されたのです。これも西相信用金庫は真鶴と湯河原で一つになって金融機関も持っていた。民間団体だってそうです。ロータリーだってライオンズだって、こういう様なところは湯河原と真鶴と一緒にやっていくわけです。こんなことでありましたから、十分に必然性がある、もう結論をだす時に来ているんだよということになる。

また話を元に戻しますが、だから私が一方的に言ったものではないということです。これは先ほども申しました通り、米岡さんと私とは二〇年来の友達として個人的な付き合いをしていると言いましたけれども、私は昭和五八年に町の議会議員になりましたが、米岡さんはそれより一年早く湯河原町の議会議員になっております。当時は神奈川五区で自民党は河野洋平さんと亀井善之さんに分かれて、私らはよく保守系じゃないといわれるのですが、おやじも保守系ですから私は亀井派なのです。そして河野派というのがあるのです。その亀井派の若い四〇歳代の議員が小田原市を中心とした南足柄上五町、下三町県政の一〇か市町村の議員が集まって研究会を作ろう。これから何ごとも一町だけでは帰結しない、お互いに知恵を出し合いながら、お互いに提携しながら行かないと、町の行政は成り立って行かないよということで組んだわけです。その時のメンバーなのです。そのメンバーが二〇年経つと年を取りますから、私が初めてですが、真鶴で町長が生まれ、湯河原で町長が生まれ、大井で町長が生まれ、南足柄で県議会議員が出るといったところまで年をとっているわけです。その頃から広域あるいは合併ということを研究していたわけです。ですから、この時もお祝いの席ですから、いきなり米岡さんが知らないでびっくりした顔をしたら困るわけですから、米岡さんにも合併の話をしますよと言ったら、うんやってくれるか、あんたがやってくれたら、きっと湯河

原も熱が上がるだろうと言うことで、あうんの呼吸の仲から出てきたわけです。

ただこの時期には、合併の特例債などというところまではいっていなくて、そこまで来ていないから実質上の財政的なメリットは見えてこない。私たちが出た一一年に出してそのままとん拍子で進んでいけば今度の合併も、もしかすると素直に行ったのではないかなとの悔いは残ります。これが一一年に話を出しながら実質的にスタートするのが、それから二年後ということになります。

平成一三年三月に両町の議会の特別委員会ができました。なぜ一三年三月にできたかという点、アメの部分が出てきたのです。今しなければ一六年三月末までに合併しないと特例債をもらえない、急がないと合併に間に合わないぞと言うので、あたふたと特別委員会ができ、あたかもそれを目当てのような合併に特に真鶴の住民には映ったのです。ですから、この二年くらいの大事な時間を無駄に過ぎてしまったなと悔いが残ります。あまり急いでも仕様がないと私も思いましたから黙っていました。後から考えるとこちらの二年があつたならなどの悔いは残ります。

そして一四年四月には両町の議会には合同協議会ができます。一四年六月には私の任期が終わる。お約束ですから、私はもう三期で辞めていきますと表明しています。当時は神奈川新聞ですけれど、一月になるとその時の首長議会の選挙が流れているのですけれども、横浜高秀市長など、それには立候補予定者、現職は当然出ている。現職で私が出ていない。別の欄に出ていると「現職三木氏引退の意向。三期で辞めるのが三木の政治信条。何があってもやらないとの意向」ということで書いてあるわけです。私は辞めるつもりですが、ただし合併について積み残したものはやっという。これは誰が町長になってもこの合併はやってもらわなければということを残していったのです。やはり何人かの候補が挙がったけれども、それは議会、町民の見る目の中から、どうしても新しい町長が出たら合併はできなろう、不可能だということはありません。

その中で二月米岡さんとある時一緒にしみじみと話しをしたのです。二人きりで話をするのはあまりないのですが、あんなじやなきやこの事業はやって行けないよと言いました。私は苦渋の決断なんかしませんが、仕様がなかなか、見回しても出ては消え出ては消えの候補の中で議会も途中で申し訳ない。やったとしても二年とちょっとしかやらない町長ですから、だからみんなで作っていると云ったって、やはり町長選挙になればそれなりの苦勞をするわけですから。誰もやる人がないわけで。それでも競争になって公約が合併、湯河原町との合併を進めて行きます。任意の協議会を立ち上げます。当時小田急が撤退した真鶴半島に車を止めます。自然を保護して行きますという約束をして行きます。後一つ大事なこと、それはこの神奈川大学だって安閑としていられない、子供がどんどん減って行くわけですから。要するに真鶴に岩小学校という小学校があるのですが、今年の四月入る子供達が八人に満たない。一学年が八人に満たなくて学校はやって行かれるのか、子供達に良い教育環境は提供できるのかという問題になるのです。ということがありますから、来年四月から学校の統合、新しいひらがなの「まなずる小学校」というものができることになりましたけれども統合しなければいけない。

この三つの公約にして、四選果たしました。私は心ならずも、不本意ながら三選で辞めると言っておきながら、自分の信条を曲げたわけですから、恥ずかしながらということで作らせて頂きました。その代わり、三つの課題をきちんとやり遂げて行きたいと考えて合併の協議会に入って行くわけです。これで任意の協議会、当選と同時に七月の一日から四期目がスタートするわけですから、すぐさま八月中にでも任意の協議会を立ち上げるということを当選の時に話しております。相手があることですから、これは九月の五日ということになったのですが、この平成一四年九月の五日に真鶴町、湯河原町合併協議会の任意の協議会が立ち上ったわけです。

事実上湯河原と真鶴が合併したということ、お手元の資料をご覧ください。真鶴というのは先ほど言ったよう

に人口比では一对三。真鶴がおよそ九〇〇〇、湯河原が二万七〇〇〇。面積で行くと真鶴は七〇二平方キロ、湯河原は大体この七倍くらいの面積があります。これだけ大きな違いのあります両町です。また財政的にも先ほど言いました様に、自分の収入ということで考えれば、湯河原の方が収入は多いのです。真鶴の方が少ないのです。ただし借金の額というと湯河原の方が多いんです。それはやはり湯河原の方が積極的に始終何かやっておりますから、真鶴は真鶴で下水道かかったばかりですから、財政を圧迫したということだって大きな要因になっていくわけですから、これから真鶴はお金がかかる町になっていくわけです。今まではよくやったと言われてもこれから大変なんだよという時に差し掛かっているわけです。

三ページ目は見ていただければ分かりますけれども、これは出口でのアンケートのための資料です。ここまで両町で話がまとまりましたということです。私は出口でアンケートをする。出口でやるなら住民投票も入り口でやるべきものではない。町がどうなるか分からないところで町民が判断しても困るということで、出口でということになる。その前に任意の協議会から公定の協議会に移るという前に一度アンケートをしています。湯河原と真鶴町はこれに近しいところまで新しい両町が一緒になって三万人以上になるから、これも特例で市にしてくれると国が言うのです。私も米岡さんの市になんかなりたくないと思っています。ただ両町町民は神奈川県何々市がいい。足柄下郡なんて恥ずかしいというのです。そんなふうに考えているんです。

実際私共がやっていて、市になったらまず福祉事務所作るんだよ。福祉事務所を作ったらどれだけ金がかかるのか分かっているのかいと言った。そんなことは県に任せておいた方が良く私はそういう考えです。米岡さんもそうだそうだと言う。しかし両町民は市になりたい。市じゃなければ嫌だ。だから市になることが選ばれたのです。そして、名前については後でお話しますが、湯河原市という名前にします。



そして役所は今ある湯河原町役場を新しい新市の役所に使います。ただしここで、市になると町民が選ぶ中で、いやながら福祉事務所を作らなければならない。福祉まで湯河原に持つて行かない。真鶴の町役場が残っていますから、あれを単なる支所機能だけで終わらせない。福祉事務所を置きますよ。福祉の関連の仕事をさせます。さらに町づくり条例を運用して行くための部署もここに置きます。

町役場のすぐ下には診療所がある。神奈川県の中に入院施設を持ったただ一つの診療所です。他の町村はいくら裕福でも全て入院施設は取りやめているのです。周りに病院があるからです。湯河原も真鶴もさらにあるから、取りやめても良いのですが、年間一億円もつぎ込みをして行く大きな財政負担を承知で真鶴は頑張つて診療所を持っている。この診療所も新市になつてもそのままの形でやって行きます。保健センターは両町にあります。真鶴町は真鶴駅のすぐ北側に、歩いて五分とかからないところに保健センターがある。先ほど言ったように一緒になつても湯河原の約三分に一人の人はその保健センターを使った方が良好いわけですから、その保健センターも残すということです。役所の単なる支所に終わらせない役所にして行きます。

議員の定数も二四名、これは少し多いですが、やはり一回目の選挙が二四名くらいで、ましてこの任期が九月です。湯河原は昨年選挙をしたばかりで、一年しか経っていないけれども、もし合併があるとしたら、真鶴の議会選挙に合わせて両町の新しい新市の議会議員を決める。そうなると二四人くらい人が必要になる。二〇人くらいが適正な数字だと思っております。ただし二四人これは致し方ないだろうということで議会の方で決めてきた。少し多いと思ひますけれども、そういう事情も合つて二四人にします。

後一つは上水道の水道料金のことです。神奈川県の中で一番安いところに位置しているのが湯河原の水道料金です。これは川も豊富にありますから、この水道料金なのです。真鶴町の水道料金はこれは一番高いところです。土地に水

源がない。先ほど言ったように湯河原から水をいただいている。いただいていると言ったって湯河原だってただでは出さない。買うわけですからね。水を買ってそれを供給しているのですから、それはスーパーで売っているボトルの水と同じですから高いわけです。その代わりいろいろな水がミックスされているから真鶴の水はうまいのだ。湯河原の水よりうまいのだという評判です。高いので合わないといっていますが、その水がもし合併すると湯河原料金になる。私の家ですと、一家五人の家族で月五〇〇〇円というのは標準なのです。湯河原は二六〇〇円ということで、合併するとこれが二六〇〇円にしてくれる。もし合併しなかったら、私は六〇〇〇円になる。つまり二割アップでやれると思うのですが、いま見たら何と三五%アップでした。七五〇〇円ですから、湯河原の五人家族と月で五〇〇円も違うのです。駐車場の料金が出てしまうのです。こんなメリットがあるということです。さらにこれで下水道が来年の四月から開通します。下水道料金というのは水道料金にかかってくるわけですから、また高くなる。

湯河原と真鶴では若い人はどちらに住むかといえば湯河原に住みますよ。うちの息子だって真鶴に家がなければ湯河原に住みますよ。そういう差ができてきますよ。こんなメリットがあるのでですよ。その上で両町合わせて国から来る特例策、あるいは県の上乗せ。先ほど言った水道料の格差是正のためにも、神奈川県は湯河原、真鶴が抱える水道に借金、真鶴は一般会計はよくやっていると言われますけれども、水道会計では何とか白前の水をと努力した結果、累積赤字が三億円になっている。その三億円に払う利子が年間で五〇〇〇万の利子を真鶴は払っているのです。これを県が立て替えて行くわけです。高利のものを立て替えて行こうということと県の補助等がありまして、合併でこの水がこの四月から私は七五〇〇円を納めなければいけないのが、合併になっているとしたら二六〇〇円で済むのだからこんな良いことはないわけです。それでも真鶴の町民は水ぐらい高くていいということです。水がすべての物価の基になる。酒を飲んでも何でも水揚げ、水揚げと言いますね。水をいくら使ったかによってそこうちが繁盛してい

るかどうかが決まるのです。水の料金で値が決まる。真鶴に行ったら物価が高いというのは、水が高いから物価が高いのです。

ここを直して行かなければいけないという話をするけれども、やはりいろいろな反対議論があつて真鶴の町民は合併を選ばないということになっておるわけです。先ほど言った真鶴の独自性を残す。ふたつの町になるけれど、都市計画の手法が違つてゐる。真鶴には町作り条例というものがある。合併でなくなる。私は初めに約束しているのです。なくさない。なくすようなことであつたら、この合併は私が一番初めに反対する。だから合併反対派が何か触ることができない様に、この町作り条例の指導をした五十嵐先生ですらそれはできない。ですから町民もそう思つてゐる。当然時限的なものでしょうけれども、自治組織というものを認めて、一国二制度あつてもいいということを認めてくれたわけです。後追いをしてくれた。真鶴は頑として動かない。何としてもこれがネックでできないとするのなら、他にもそういうところはある。これはそればかりでできたわけではないですけれども、残したために五カ町村などは北海道で全部に支所を置いて、そこに全部首長と変わらない助役のようなものを置くということまでやつてきて、そのような弊害だつて確かにあるのです。

けれど、真鶴と湯河原はそうではなく、この方法を捉えて町づくり条例も残し、そしてその結論は先延ばしと言われても、およそ一〇年の間にこの結論を出せばいい。湯河原の人はそうではない、真鶴の条例をなくしてしまえばいいと思つてゐるでしょうが、やがて私は世の中は真鶴が進んでいる方が都市計画の手法としては先に行つてゐるはずだと思ふのです。ならば今度出てきた全国の町村が景観条例を作ろうとした。真鶴にはもう景観条例がある。自治基本条例を作る。自治基本条例の元になる町づくり条例というものがあるのです。だからこの合併の中でもこれは残します。その上で自治基本条例をまず新市の市長さんに作ってもらい、これによつて住民参加が確保された新しい市が

できるのだ。そこはきつと発展する市になるであろうということです。

良いことがある反面やはり、合併は究極の行財政改革と言います。スリムにする。役所は一つになる。職員も減らさなければいけない。先ほど言った議員だって両方合わせれば三八名いるのが二四名になり、やがて二〇名、一八名になる。議員も減らさなければいけない。そういうところで、一つひとつの部署で抵抗が起きているわけです。新聞報道はいろいろあっても良いですけども、そのメリット、デメリット挙げる。それはそれぞれ一〇〇の合併があれば一〇〇の対応がある。メリット、デメリットそれぞれ違うんだ。でも一応にこの特例債を目当てにアメの部分を目当てに合併するとこんなことがいけなくなる。こういうことが流される。

われわれの言うことよりも新聞に載っているそんなことの方を取り上げる。合併する湯河原は借金が多いんだってよ。湯河原に行けば、真鶴なんて一緒になったら下水道だ何だって、金がかかるんだよ。でも湯河原の方の興味はそれでも一緒になった方が良いよねと八割くらいの方が合併に賛成しているのです。真鶴の方は、まず役所が湯河原の方に行ってしまう。あるいは借金があつちはある。名前は真鶴が消えてしまう。本当は消えないです。真鶴半島は湯河原半島にはならないのだから。真鶴駅は湯河原駅にはならないのだから。真鶴港は真鶴港なんだよという話をしてる。ちゃんと地名は残ります。そんなこといったら横浜ってどうなのということになるわけです。どこから来たものということになる。そういうことで考えてはいけないといつても、やはり反対の理由としてはそういうことが多く挙げられて、後に合併の大きな抵抗になって行くということです。

さらにもう一ついいことは、先ほど言った学校の統合があります。湯河原だって同じなのです。新しい湯河原中学校はマンモス校と言われて、一時期は一学年に一二学級もあったのです。そのマンモス校の湯河原校はどんどん減ってきたので、適正規模にはなっているのですが、これを建て替えるとなると合併する方が、もっと近いところに真鶴

中学校があるわけです。その真鶴中学校は校舎を増やさなくて新しい湯河原の人達を迎え入れられる。この合併の特例債を使って学校建設を行っても、今のよう大きな規模でないものを作ること。効率の良い行政運営が学校一つ取ってもできることになっていくわけです。

幼稚園も然りです。福浦幼稚園が、湯河原幼稚園がなくなる。新しく作るのではない。真鶴の小学校を統合した岩小学校の跡地に幼稚園を作ろうという。そこになくなる幼稚園、福浦の人、川堀の人が通えるようにできないだろうか。そういう作業まで、合併は走りながら新しい形が出てきているわけです。それが平成一五年七月にアンケートをやって、法定協議会に行つてよろしいかというアンケートの時には、七〇パーセントの人が賛成したのです。法定協議会に進んでいい。それでそのまま合併に行くんだなと思っていました。それで今言ったようなこういう形で、最後の資料をお配りするわけです。これは細かい隣のことでですから、真鶴が単独で行く。あるいは七、八ページに書いております。単独で行くか、あるいは合併したらということ。こういうことをやりますと、明らかにこのまま行くわけではないです。支出をだいたい二〇パーセントは減らさなければいけない。二〇パーセントというのは大まかな数字ですが、長野県の田中康夫県知事が言っています。これは県知事が実際に居もしない泰阜村に住民票を置いているのですから問題なのです。田中さんの収入が泰阜村に入るか入らないかは大きな違いなのです。あの泰阜村でさえ一七パーセント削らなければ一町で行けないというものが出ているのです。ニセコだってそうです。財政特化計画というものを掲げて、二〇パーセント削つたら、本当に息ができないくらい自治体になるわけです。

真鶴町は組合がないといったら語弊はあるのですが、一三〇人くらいしかない職員ですが、二人だけ組合に入っている人がいて、今回一人辞めてしまったので、もう組合もなくなってしまった。組合がないに等しいから究極の財政改革をやってきた。だから真鶴は一町でもやっで行ける。これ以上減らせないとところまで来ている。それでも二〇



パーセント以上減らせという。息ができないような町になって行くという話なのです。それでも先ほど言ったようないくつかのデメリットの一つを上げながら反対意見が、次の翌年に住民説明会を二月、三月に各所で行いました。私は一五年の十一月に真鶴の大きな問題である下水道の問題で湯河原に送るポンプ場をつくる位置で悩んできました。ですから最後の詰めとして、十一月一日から酒を止めているのですが、酒が好きで飲むとちよつと酒乱の気味あるといわれるくらい。職員でも誰でも捕まえてはけんかを始めるといやがられているのですが、なぜ止めたかという最終段階で住民の人との話し合いで「いつでも呼んで下さい。夜は全部取ってあります」と言つてあつたので、酒を飲んでいられませんか、それから酒を止めた。それでこれが二月からの合併の説明会に入る。昼間もある、夜もあるけれど全て私は公務を排除して合併の説明会に出かけますから、この説明に入りました。

説明が足りないといいますけれど、出張つて行つても人は来ない。呼んで下さいといっても呼んでくれない。それで役場は説明が足りないと言うわけでしょう。選挙やつて六時から八時まで延長すれば投票率が高くなるだろうと変えた第一回目の選挙が、私の選挙でした。そして一〇パーセント投票率が高くなりましたが、候補者がちよつと氣の利いた候補者だったから高くなつただけで、二期目なんていうのは私が立つのが決まっている候補者だったから五八パーセントだったけれども、それは時間を延ばしたからではないのです。そんなに人間は集まっていけないよと言つたのです。それに加えて今の費用対効果を考えたら、一人や二人のためにパーッと呼ぶのです。今度も真鶴町は七時まで窓口を開いている。土日も開く。そんなに来やしませんよ。住民の方だつてそのくらい必要なものならば、会社を休むくらいのことはしなければいけない。その方がよっぽど安くつくのです。何でも役所がやろうと思つたら大きな間違いです。

話は飛びますが、役所が湯河原に行つたつて、私が問題ないと言つてゐる。例えば郵便局でできゐる。そのうちセ

ブインレブンで住民票が取れるようになるのだ。私が辞めて七カ月の間に役場へ行ったのは一回きりです。正式には二回です。一回は確定申告です。途中で辞めたから一回戻ってきますから。確定申告は役場に行ったわけではないが、一度窓口で相談をした。あと一回はこの資料がないかどうか行きましたら、あるということだったのでこの資料をもらいに行っただけのことです。私ですら二回くらいのことですから、ほとんどないです。

そしてそのアンケートをやったら、まだ半年、八カ月くらいしか経っていないのに七〇パーセントの次に移行していいと言っていた町民が、説明会をしてこれだけ詳しく説明をしたけれど、やはり不安材料のPRの方が効いたという結果になったのです。そして反対するためには不安材料は一つでいい。合併するための条件としたら、八割方納得しなければうんいいとは言わない。水道料が下がるくらいのことではうんとは言わない。水道料だけじゃないか、みたいなことになるのです。それでこれだけのメリットがあると言っても、名前がなくなってしまう。役所が遠くなる。借金の多い町は嫌だ。ならば小田原ならいいと言うのですか。小田原ならもっと遠くなるのです。湯河原なら歩いていける。小田原は足の悪い人は行けないでしょう。私の家で私の家から湯河原町役場まで三五分で行ってしまう。天気の良い日なら歩ける距離です。そのくらいで行けるところにあるわけでした、先ほど聞いたら小田原の駅までは三〇分かかる。それが遠くなる。小田原ならよかったのに。

小田原はそのようなことは考えていません。昭和三〇年の昭和の大合併の時の始末の付いていない周辺部まで色々抱えている真鶴町のことなんて考えていない。それでも西さがみ連邦共和国というような試みをしているけれど、やがてはそういう方向にいくでしょう。今年の三月までにはいらない。それでも五八パーセントの反対があった。さあどうなるということになる。私は住民投票はあまり好まないもので、議会でも住民投票はやりませんと断固として賛成ではなかったのです。さつき言ったような反対のしやすい条件になるからです。さて議会は自分達で決断できないし、

議会はこれを住民投票にかけるとして住民投票の条例を議会提案で作ったのです。

これに沿って五八％の反対があるならば、手をこまねいては同じ結果になるであろう。もう少し詳しいことをきちんと話をしていこうということで、三四〇〇の世帯を私は回ったのです。六月の二四日から延べ三一日間、疑似世帯もあるわけで大体二八〇〇世帯を回るとほぼ全町の個別訪問ができるのです。七月二七、二八日というのは真鶴の貴船祭りという古くからの祭りがあるからこの日は私は何があっても休むことにしているのです。去年だけは松沢知事が真鶴の祭りを見に来たいというので、私は祭りに参加しないで出かけたら、台風騒ぎの大雨で市役所まで行ったのですが、祭りが途中で中止になるようなことがあり、県知事がそんなことをするから雨が降ったのではないか。そんなこともないでしょうけれど、そう思ったりもしました。

梅雨時があり、去年の七月は猛暑で真夏日の連続という中でしたので、ついに七月三一日までに回り切れないほどでした。八月八日が決められた時にもう回れない。町長選挙で言えば告示が入ってしまうわけで、その中ではもう回れない。猛暑の中、先ほども言いました今日持ってきたこの鞆に資料を詰めて、傘を一本差して、半袖にループ・タイで汗をかきながら回って、回り終えたのが二七〇〇世帯でした。二七〇〇世帯ですけれども全部のうちのいるわけではない。三軒に一軒は留守です。留守のうちには手紙大のメモを何月何日何時何分に三木邦之が訪問致しました。後一度来いというのなら出かけますからということを書いて全部個別に入れて参ってきました。これは一つひとつパソコンに入れた時のものです。「六月二四日晴れ。真鶴七三軒。内二八軒が留守」こうして回って行く。そして一〇人でも五人でも集まれば、夜でも私が行って話をしますから、それまでの責任を果たしたつもりでやったのですが、この住民投票の結果が八月八日。

あなたの投票で真鶴町の明日が決まるのです。私の檄文のようなものを八月一日に町報に載せながら、これからの

真鶴町、湯河原町のためにやはり合併していかねければ大変なことになるだろうという中で、湯河原町は変わらず真鶴町の合併のことを見守っていてくれたのです。結果は二六〇四の反対、二五七六の賛成。わずか二八票です。八月九日には私は辞表を出しました。マスコミにも議会にも同じ様にする。一町村長ですが、これだけでかい活字で神奈川新聞の中でも見ない大きさですが辞表が載りました。住民投票の結果を受けてどう考えるかということ、「前回のアンケートの結果、このままの合併を取りやめないで欲しいという住民の願いを議会が認めて、全会一致で議決した湯河原町との合併について住民投票条例の執行に当たり、六月二十四日から七月三十一日先ほど申した通り実日数三十一日間、二七五〇軒余りのお宅を訪問し、町長としての説明責任は果たしたつもりであります。

昨八日施行された投票の結果は二八票の僅差でありましたが、反対の意見が有効票の過半数を超しましたので、お約束の通り私の手で合併調印も議案提案も致しません。しかしながら、湯河原町との合併なくして、この町の財政基盤の確立はおぼつかないと信じ、そのことを町民に説明してきた私が自立を選んだ町の長として相応しいとは思えません。したがって、この際町長職を辞したいと思えます」。この様に議長に辞職願いを出して八月十三日、臨時議会でこれが認められた。

ただし合併はこれで終わったのではない。私が辞めたので町長選挙が五〇日以内に開かれる。ここで最終のものが、たった二八票ですから、恐らく両方とも無効票を足すと五〇%にはいかない。四九%台の中での結果ですから。私はお約束していましたから。一票でも、〇・五票でも多い方の結論に従いますという、その結論に従って辞めたわけですから、この次の町長がどうなるのか。そして候補に上がったのが、賛成をする側と反対をする側です。ただし選挙戦を見ると自分が当選したら、合併がほかされてしまう。どちらが町長になっても、もう合併などできないような選挙になってしまっている。私のもうその選挙では一步も外へは出ません。出るとつまらないことを言うから、どちら

かの誹謗になるからでないし、役場にも一切行かない。残念ですが、悲しいかな真鶴と湯河原の合併はこれで今回一〇〇%なくなったというのが今までの状況なのです。

いろいろなことは悔いとして残ります。二七〇〇世帯は回った。後一〇〇世帯回れば、二八票はもしかしたらという私個人としての悔いはあるのです。たった一票でも賛成が多ければ、これはどんな反対があっても、辞める時も強引ですが、決める時もそうです。一票でも上回ればルール通りに合併はなったと思います。この二八票というのは非常に重い、民主主義の実践、住民投票の怖さというものをつくづく感じられたわけです。

これはいろいろな自由があるのですが、時代の背景もある。大手金融機関が破綻していく。大手ゼネコンまでも破綻していく。そして市町村の破綻にまで至っていく。そういうことがやはり町民の中で他人事でない、対岸の火事ではないのだという。自分の家の亭主が農協の合併、信用金庫の合併、郵便局が一緒になったということであると、どうしても小さい方の職員はこれはやはり悲哀を嘗めることが多く伝えられる。事実上そういうことがある。

そうしますと湯河原と真鶴に合併となった時に、真鶴の方にそのアレルギーが出ることはやむを得ないことであります。また名称も湯河原として残る。いいじゃないかと私がいくら口を酸っぱくして言ったって、じゃあ真鶴として残したっていいじゃないかとなると答弁の仕様がないうことです。それはきちん法定の協議会の中で下駄を預けられた。米岡町長と私がこの協議会の中で決まらないか、決めて下さいと預けられた。そしてその中で何の名前でもいいというのではなく、湯河原、真鶴、新しい市の名前、西相模、西湘。この四つの中から選ぶということで、真剣に討議をした結果、湯河原町が残ったということは協議会の議事録の中でもきちんと言っているのですが、やはり真鶴町民にとってはそれでは対等合併ではないではないかということが残ったのです。

合併の一番の抵抗族は市町村長。自分が任期があるのを途中で辞めるなっているのではない。私は覚悟しているから、



半分でも最後の四期目は、一期が四年間なら私は出ないけれど、二年そこで終わる町長だから、それは最後まで引き受けようということをやったわけです。私は政治信条を曲げてやった。だけどこれが新しい町長になったら、これは神奈川県の中で他でやっていますが、合併の中で町長が代わっています。そうしますとなかなか任期途中で腹を括ることができない。そういうこともあります。

また議会はもっと定数がへるわけです。恐らく二四人と言いましたが、真鶴は今度条例で一六人を、四人にしましたか、それでも神奈川県で一番定数の少ない方です。だけど合併すると二、四人といっても真鶴の椅子といたら、最大取ったとしても八人しかない。一六人の議員が二人に一人落ちるような議会の抵抗がある。後一つは先ほと言った職員です。職員は同じ様に他の統合があるようにそれを身近に感じておりますから、職員はやはりこのままでいられるなら真鶴の方がいいという考えが残る。

その上で真鶴は遅れているインフラ整備の中で特に下水道事業。湯河原はほぼ終わっているのですが、それらに関わる建設業者は真鶴の一町でやっていたら、向こう二〇年くらいは五軒か六軒の建設業者で分け合えるものを、合併すれば湯河原と一緒にの川の中でやるから自分達の仕事が減るのではないかという複雑な状況も出てくる。先ほど言ったようにどれ一つを取っても自分にとって分が悪いことがあるとしたら、反対だということになってしまう。ですから、真鶴は五八パーセントの中何回も町長が回ったって八パーセントしか下がらなかったのかと言うけれど、五〇パーセントまで賛成が残ったのはまだまだ真鶴一町ではできないということです。私が説明して回った時に、これは合併しなければだめだとは断言していませんけれども、合併しなかったら皆さんが行政にお願いするのではなく、自分達の力でやっていこうという気持ちにならないとだめですということです。先ほどのように、夜間も役場を開け。日曜日も開け何て言っていたらできるわけではないのです。その時は自分達が仕事を休んで平日役場に行きましようくら

いのこともしなければいけない。ごみだつて自分達できちんとする。ごみなんかは今でもきれいになつていますけれども。

やはり住民の責務ということをきちんとしていかなければ、小さな町で残ることができない。それをやつたとしても国の方向としては、もう一万以下の町には国税のしつぺ返しのようなことも当然起きてきます。その上で県がこれを新たに県の力で合併の方にあと一度考え直せというようなことに働いてくる。それも嫌だとなるとヨーロッパでは小さい町だつてよくやっているではないかと反対する人達が口にする言葉です。ヨーロッパではなぜやっているかと言えば、周辺自治体つまり真鶴で言えば小田原のような所が大きな事業は賄うわけです。基本的な窓口とか支所を置くような程度のことしかなかなかやらせてくれないということになるわけです。特例的な団体と位置づけていますが、西尾試案などアメと鞭の鞭の方で出てきたのはこの部分を言うのです。

早晚、神奈川県一八町村は少ないから言うのですが、日本全国で村は今なくなろうとしている。六〇〇ある村の中で五〇くらいしか残ろうとしない。一割あるかないかです。もう既にこの合併ですべての村が消えていっても不思議ではない。清川のようなダムや何かで財源があるところならいいのです。ですが、財源があつたところで先ほど言ったように清川村が三三〇〇できたら真鶴の岩地区です。来年の小学校に上がる生徒が何人になるか。金があればいいという問題ではなく、小規模の学校ではやっていけないものがあるわけです。

そういう中で合併が今やって行くのですが、それぞれの思惑の中でやはり一つ成功すればその裏に事情があり、一つ失敗すればその裏に事情があり、まして一番問題になる名前。私は湯河原市と言うのは決して悪くないと思います。が、新しい名前にすればいいのかといえそうでもなく、愛知の方で空港の名前と一緒にしたら、うまく行っていた合併が名前一つで破算になったとかいうことも聞きます。あるいは秋田の方の名前で駄目になった例がある。新し

い名前にしたって、だめなものはだめです。これがもし真鶴の住民四〇パーセントが新しい名前を望んだ。その人達が新しい名前だからいいと言ってくれたかと言うと、例えば西相模市としたら、何だこんな名前にしてとなる。

これは分かっていることですが、反対の理由付けとしてはどれを取っても反対の理由にはなる。二七〇〇世帯を回って、一人ひとりに会って見て、小さい町として何とかやって行かないのかと聞かれることが多かった。とりとめの話にはなりましたが、私の話はこのくらいにさせていただきますと思います。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。なかなか表に出せないようなお話しを含めて、大変貴重なお話しを伺ったように思います。まだ少し時間がございますので、会場にいらっしゃる方でぜひこれを質問したいというのがおありの方は拳手をお願いいたします。

質問 反対、賛成の割合の中で反対した人達と賛成した人達の世代的な色分けはありましたか。

三木 これは特に私はその後に辞めてきてしまってますが、聞いておるところによれば、このアンケート、住民投票は一八歳以上の町民ならびに町に居住する外国人全てに行った。やはり若い世代の一八歳、これがかなり反対に回ったというのはあります。それと老人、年寄りの世代。この両方の上の部分がやはり反対が多いということです。それが一番決め手になったように聞いております。

質問 お年寄りとは分かるのですが、若い人達が反対に回ったものはどのように分析されていらっしゃるのですか。

三木 先ほど言ったように、若い人達は名前もそうですが、まだまだ世の中の仕組み全体について分からない部分がありますから、やはり何とかやって行けるじゃないかという形。報道や何かを見てもこんなに立派にやっていく町があるとかいうものがよく紹介される。真鶴はそれができるはずじゃないかということですね。

一番は成人式を見れば分かるように、違う学校が一緒に集まるから乱闘が起こるのです。真鶴町は静かなものです。

成人式だって、一つの学校ですからね。私が話をしたって静かに聞いていてくれます。それで拍手してくれます。普段はいかつい顔をしている者も。別の学校がいると両方で誇示しながらやるから、そうすると中学校同士のものがまだ冷め遣らないわけです。一八、一九のまだ世の中に出ない人達はね。今時の中学校なんて、湯河原の学校はこうだ、湯河原の者が来るとこうなるとかそんな話もあるわけでした。

司会 ほかにいらっしゃいますか。

質問 私は真鶴町の都市計画課の方と懇意にさせていただいております、きのう町議会で岩地区のアカサマンションというのが平成三年頃に建てる予定があったものを、去年になってまた建てるということを神奈川県に建築許可を出したそうで、昨日議会で九対四で条例違反を確認する議決があったそうですけれども、最近町の方に出入りされていないので答え難いかもしれませんが、ぜひその辺がどうなっているのか聞きたいと思います。

三木 もしかすると私がこうして一軒一軒回るくらいみんなと話をしているつもりですが、議長を三年以上やっている人間だと、私は一四年と一か月一三日やっていますけれども、九九パーセント全会一致です。議会は、予算であろうが決算であろうが全会一致です。その場合徹底した議論をするわけです。こういったものを議会が出すとしたら、全会一致くらいに行かないと九対四なんていったらよわいですよ。

私のやった水の条例、町づくり条例、全会一致ですからね。一人反対したり、退席したのは自分が退席しただけで、票に現われなかったただけでいた人は全部賛成しての条例です。あの条例の強いところはそういうところです。九対四では非常に業者に足元を見られる。その前にやるべきことをやっておかなければいけない。県が確認申請を出す前に県ともっと、あるいは今の松沢知事と真鶴の町づくり条例をどう考えるのか、許可していないものの確認申請を下ろしてもらおう。長州さんは当時言いました。私がやった確認申請を下ろさざるを得ない。何でだ。県知事の権限なら私

が止めます。これは建築主事で職員が訴えられるというような話をした。ただし直訴をした。当時の県会議長の梅沢さんの議長室に宮森副知事が来たのです。毎日新聞に連載一二回された最後の三回は真鶴のことですが、宮森さんはこの確認申請を理由をつけて止めたのです。それであの建物が建たずに残った。そういう事があるので、県ともやって行かなければならない。業者だけを相手にしていたのではだめ。業者は確認申請ができていて建つ条件が合ったら建つのは当たり前でしょう。それを差し止めるとしたら賠償責任が出てくるだけです。

だから四人の議員がいたとしたら、そんなことまでして町長が一人で賠償責任を負うならいいけれど、町に賠償したらどうなるなどというようになる。その時に徹底した論議をしなければいけない。この条例がどうしてできたのか。そうなる中途半端だと足元を見られることになるよということは、ある人を通して弱いよという話はしておきました。

司会 他にいらっしゃいますか。

質問 合併の議論の前に広域連合という形で考えられなかったのかということと、町の財政がかなり厳しい中で、私はデータがないので分からないのですが、たとえばNPOだとか、そういうところの活用は考えてこられたのかどうかをお聞きしたいです。

三木 先ほどお話ししていますように昭和四〇年から広域が始まって、広域連合どころかほとんど福祉、教育を除いては湯河原、真鶴は一体で進めてきた。これ以上の広域は合併以外にないというのが結論でした。このまま広域を続けて行くこうというのならいい。逆に相手のあることですから、広域を進めて行って、今の湯河原の水の料金が月々二六〇〇円なのには五〇〇〇円で、それが七五〇〇円になるというようなものを広域の中で譲り合って、こんなことをというならばいいのですが、これ以上の両町もメリットを求めて行くとしたら合併。頭を一つにすること。こ



れが一番だと思った。

だからこれができないならば、湯河原の米岡町長も湯河原も一町ではやって行けない。真鶴が嫌だとするならば、それこそ熱海と合併しようといま考えています。真鶴に固執しているわけにはいきませんからね。湯河原は小田原との付き合いより熱海との付き合いの方が多いのです。

笑い話ではないですが、湯河原の町民が亡くなると真鶴に来て遺体は火葬される。骨になったら川を越えて泉地区というのは熱海市のお墓に埋まるのです。だから熱海の方が近いのです。旅館もいっぱい大きいのが建っている。だから熱海は昭和の合併の時だって大騒動だったのです。だから泉地区を放さなかった。三段跳びでやれば渡れるくらいの川一つで子供の時からつきあいですから。湯河原は熱海の方を向くのです。真鶴は小田原の方を向く。そういう違いは確かにあるのです。だから合併というのは難しいです。同じ様に二つだけの問題ではない。中で広域だけではやはり限界がある。福祉だって広域だけでは限界がある。だから合併によって効率のいい、足腰の強い自治体を作って行こうということが私たちの願いであつたけれども、そこが分かつていてやはり反対だというのはのらないですが、反省としてはそこまで分からなかったということです。

本当は一七年三月ということではなく後半年延ばさせてくれ。一年延ばさせてくれというくらいの合併であるならば、やはり合併したと思います。ただ一七年三月ということですからこれで話がこじれると水道についたって、真鶴にはかなり控えて請求していたんだ。今度はそうはいかない。私の時代だったら二〇パーセント上げれば済むものを湯河原町だって水道料はもう少しもらはなければ困ります。そうすると三五パーセント上げざるを得ない。本来五〇パーセント上げなければいけない。そういう辛さが今現実にあるのです。今になったら何でそんなこと分かつていたらと。ちゃんとここに全部何回も口を酸っぱくして言っているのですが、それでもなかなか出てこない。これが地方自治の

現実です。

司会 時間になりましたので、終わりにさせていただきます。貴重なお話をありがとうございました。